The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	祇園祭・大津祭伝来の花鳥獣文様染織品 ： 動物入りの絵画的構図を中心に
Author(s)	吉田, 雅子
Citation	デザイン理論. 2014, 64, p. 104-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

祇園祭・大津祭伝来の花鳥獣文様染織品
── 動物入りの絵画的構図を中心に ──

吉田雅子／京都市立芸術大学

中国で明清時代に制作された花鳥獣文様の染織品が，日本に複数伝来している。今回考察対象とするのは，金地に鳥，花，動物の意匠を配した大きな長方形の品で，刺繍か綴織で作られている。これらはヨーロッパ人に向けて中国で16世紀後半以降に制作されたもので，その構図は，動物が入った絵画的構図（以下，天地のある構図と称す）と，四方向きの構図の２種に大別することができる。本発表ではこのうち天地のある構図の作に関して，新たに調査した９点の作を紹介し，天地のある構図の作の制作年代を推定し，構図展開の様態を推察した。

すでに報告されている天地のある構図の作に，祇園祭の芦刈山の見送，祇園祭の孟宗山の見送，大津祭の殺生石山の左胴掛と右胴掛，鳥取県の譲伝寺の掛物，滋賀県の西教寺の打敷の６点がある。このうち譲伝寺の作は亀井茲矩の伝来品で，慈矩の没年の1612年以前に制作されたと考えられる。茲矩は1607年，1609年，1610年に朱印状を受け，西洋（さいよう）や暹羅（シャム，現在のタイ）に向かって交易を行った。また，西教寺の作は，長谷川藤広が1616年に奉納したもので，制作年代は1616年以前であることがわかっている。藤広は1606年から1614年の間長崎奉行を務めており，複数の理由からこの作を日本に舶載した船はポルトガルである可能性が最も高いと思われる。

今回新たに公表したのは，天地のある構図の作の計９点で，大津祭では龍門滝山の左胴掛と右胴掛を調査した。その結果，左・右の胴掛は，それぞれ完全な状態の作品の下半分を切り取って仕立て直したものであることが判明した。

また，源氏山では，前掛，左胴掛，右胴掛を調査した。前掛は，完全な作品の一部が接ぎ合わされたものだが，欠損部分が多く当初の構図を推測することは難しい。左の胴掛は，完全な作品を真ん中で上下に断ち切って２つに分け，それを左右に組み替えて縫い合わせたものであることが判明した。そこで復原図を起こして，当初の構図を示した。右の胴掛も左の胴掛と同様な仕立て直しであることがわかり，当初の構図を復原図で示した。

また，メトロポリタン美術館で，MMA29.100.152，MMA29.100.153，MMA29.100.157，MMA29.100.544の計４点を調査した。これらの作品は上部が欠損しているが，構図の様子はほぼうかがうことが可能である。

以上にあげた天地のある構図の作の多くは，断片状であるため全体サイズや構図が不明瞭で，劣化が激しいため表現様式や刺繍糸の調子がわかりにくい。他方，四方向きの構図の作は，伝存数が多く，全体サイズ，構図，表現様式，刺繍糸の調子がよくわかり，制作年代の前後関係をある程度推測できる。そこで以下，四方向きの作の制作年代の前後関係を推定し，次に，天地のある構図の作が，四方向きの作のどの位置にあたるかを考える 。

四方向きの作品の傾向を略説すると，古様な作は，全体サイズが比較的小さく，構図が単純で，表現が自然で型崩れしていない。刺繍糸は細く，浮きが長く，刺しがゆるい。これらは16世紀後半以降の作と推定できる。

次に来るのは，記録や周辺情報によって16

世紀末から17世紀初頭の作と推定される基準作で，それらは自然な表現からやや離れて，装飾や誇張が生じている。

これらの基準作より遅い時期に作られたと思われる品は，全体サイズが大きく，構図がやや入り組み，表現が不自然で装飾や誇張が進んでいる。また刺繍糸が太く，糸浮きが短く，刺す密度が高い。

以上のような四方向き構図の作に，天地のある構図の作を照らし合わせてみると，天地のある構図の作は基準作とほぼ同じか，やや早い品と同じ特徴を有していることがわかる。従って，天地のある構図の作は，16世紀後半から17世紀初頭の作と考えて良いだろう。

18世紀以降の輸出用中国製染織品は複数ヨーロッパに残っているが，初期の作例は大変少ない。天地のある構図の作は，日本に集中して伝存しており，初期の輸出用染織品の事例として，大変貴重である。

このような天地のある構図は，ある日突然に成立したとは考えにくい。その原型になったものを考えるため，天地のある構図の主要部分（牡丹と瑞鳥の部分）に注目すると，それは花鳥画の図様とほぼ等しい。宋代には花鳥を表した絵画だけでなく，それを写した綴織や刺繍が制作され，この伝統は明代にも継承された。

祇園祭の黒主山の見送は，中国で明代に制作されたもので，日本に舶載されて江戸時代に見送に仕立て直されたものである。鳳凰と牡丹の図の上に，別の区画（額）が設けられ，中に２匹の獅子が配されている。黒主山の作は中国国内の需要を満たすために制作されたものであるが，このような花鳥画写しの綴織や刺繍に，ヨーロッパ人の関心をとらえた吉祥動物がつけ加えられて，ヨーロッパ人向けの動物入りの構図が作られた可能性があるだろう。

源氏山の右の胴掛は天地のある構図の作だが，四方向きの構図とほぼ同じモティーフが使われていることが，今回の調査で判明した。また，MMA29.100.152と MMA29.100.153にはほぼ同じ動物のモティーフが配されてるが，両者の孔雀の構図は左右を反転した関係になっている。また，龍門滝山の前掛と後掛の構図は，天地のある構図や四方向きの構図などの，いわゆる定型の構図にはあてはまらない事が判明した。以上の作例から，16世紀後半から17世紀初頭には，同じモティーフの配置を換えて，天地のある構図や四方向きの構図だけでなく，複数の構図が作られていたことがうかがわれる。

さらに，日野祭の岡本町で，天地のある構図の綴織を調査したが，この作は一部の図様の表現が中国製としては不自然である。日本では江戸時代の中期に中国作品を模倣する形で綴織が次第に作られ始めた。この作は，中国製ではなく，日本製の可能性があるだろう。少し時代が下る作として，祇園祭の鈴鹿山の天地のある構図の刺繍があげられる。これは明治期に日本で作られたことが知られている。天地のある構図は，中国だけでなく，日本でも模倣され，用いられていた。

今回公表した品のいくつかは，日本の祭礼町の蔵で，誰にも顧みられることなく眠っていた。これらは傷みがひどく人目を引くことはないが，この種の輸出用品が形成されていった過程を考える上で重要である。これらの品は，ヨーロッパ，インド，アンデスなどで作られた四方向き構図の作品と遠くつながる，世界でも大変貴重な作である。